

Rikkyo News Letter

Rikkyo University Centre for Asian Area Studies



パーキスタンの笑い話・ラティーファー

八 幡 綾

(立教大学大学院 文学研究科地理学専攻)

私は文化人類学を専攻し、南アジアをフィールドワークの拠点とし、インドやパーキスタンを何度か訪れてきた。今日は、そんななかで知ったパーキスタンの笑い話(ラティーファー)を紹介しようと思う。

一つは、文化の違いを越え、世界に共通するラティーファー。体育の先生が、ある女性と初めてデートをした。女性が体育の先生に、趣味を尋ねた。体育の先生曰く、「本を読むことです」。女性はその答えを聞いてとても嬉しそうに言った「私もです。ロミオとジュリエットはお読みになりました?」。体育の先生は、その女性に向かって自信ありげに答えた。「読みましたとも。ただ、ロミオは読んだけど、ジュリエットはまだ読んでいません」。

二つ目の話。あるところに、とても頭の良いモールヴィー (maulvi、イスラームの宗教学者) がいた。彼のもとに、結婚の誓い(nikah)をしたいと一組のカップルがやって来た。夫となる男性が、モールヴィーに尋ねた。「結婚の誓いをするために、あなた様にいくらお支払いしたらよろしいですか」。モールヴィーは、結婚はめでたいことであるし、いつもより多めに支払ってくれるだろうと考え、「いくらでも良いですよ。あなたが、妻となるこの女性を美しいと思う分だけ支払ってください」と答えた。するとその男は、10 ルピーを渡した。モールヴィーはその金額の少なさに呆れたが、自分でいくらでも良いと言ってしまった手前、黙ってそれを受け取った。さて、結婚の誓いも終わり、カップルが帰ろうとしたとき、突風が吹き、花嫁の顔を覆っていたパルダ(ベール)がめくれ上がった。そこで初めて花嫁の顔を目にしたモールヴィーは、慌ててその男に全額つき返した。あらわになった女の顔は、1ルピーも取れないくらい…。みなまで言わずとも、あとは察していただけるだろう。

この二つ目の話は、現地の、特にイスラーム教徒の間での習慣を知らない、理解することが少々困難かもしれない。また、パーキスタンで使用されているウルドゥー語のテンポが、日本語に訳すと失われ、その小気味よさを十分に伝えられないのが残念だ。

最近目にする海外の話題といえば、暴力や事故を取り上げたものが実に多い。笑うことは免疫力を増加させ、健康にも良いことが医学的に証明されていると聞く。こんなご時勢だからこそ、今度、外国の友人に自国の笑い話を聞かせてもらってはいかがだろうか。

チャイナタウン / インドシナタウン / アジアタウン

～パリにおけるアジア系民族社会の観察から～

立教大学アジア地域研究所所員 大橋 健一

グローバル化の進展する現代における社会文化分析において、脱領域性や錯綜性を考慮することは必須の条件となっている。われわれの取り組む「アジア」へのアプローチも単に静態的、固定的な時空間を前提にするのではなく、複合的な時空間のネットワークの上に動態的に成立、展開する「アジア」をどう構想するかが問われている。

筆者はこれまで、「都市」という人間の多元的な移動の結節点をフィールドとし、そこでの各移動者の相互作用を通じた文化的混淆の展開と都市文化の動態的性格を明らかにする研究を、特にアジアおよび北米諸都市におけるアジア系民族社会（その象徴的対象としてのチャイナタウン）を対象に進めてきたが、昨年9月より1年間在外研究を許されたため、こうした従来の研究をさらにグローバル・レベルで比較検討し、社会文化構築の動態を解明する作業として、パリを中心とする欧州の都市におけるアジア系民族社会の動態を比較調査分析することにし、フランス国立科学研究センター（CNRS）都市人類学研究所を拠点に上述のような問題意識を具体的に観察、検討する機会を得た。

パリには現在、主として3ヶ所のいわゆる「チャイナタウン」と呼ばれる地区が存在する。しかしながら、それらは単に「チャイナタウン」と表現するにはあまりに錯綜的な様相を呈している。3区マレ地区のタンブル通り周辺には、中国温州出身の皮革製

品商を主体とする地区、11区ベルヴィル地区には、カンボジア出身の潮州系中国人を中心としながらも中国大陆（特に温州）、香港、タイ出身者を含め複合的構成をとりつつ、マグレブ系、アフリカ系移民との混住が展開する地区、そして、13区シヨワジー地区の超高層集合住宅群には、インドシナ各地域出身の潮州系を中心とした中国人およびベトナム人、カンボジア人、ラオス人が複合的に構成する地区がそれぞれ展開している。筆者は主として13区の「チャイナタウン」を調査研究の対象としているが、同地区は、規模においても、またフランス社会における文化表象の点においても他を圧倒しており、約15万人と推計されるパリ首都圏のアジア系人口の約4分の1がこの地区に集中する他、「タン・フレール」「パリ・ストール」のアジア系2大スーパーマーケットチェーンによってフランスはもとよりヨーロッパ全域のアジア系食料品流通の一大拠点となっており、多くのアジア系レストラン、商店も集中している。また同地区は、パリの都市空間構造を大きく秩序づけてきたオスマンの近代都市計画が1960年代からの都市再開発によって変容する過程で出現したパリ市内にあっては極めて珍しい超高層集合住宅群に75年を画期としてインドシナ系移民が流入したという都市空間構成の上でも興味深い特徴を有している。地区の中心は旧貨物駅の再開発によって出現した「オリ



ピアード」と名付けられた高層住宅、人工地盤上のショッピングセンター、駐車場、地下物流倉庫からなる複合街区であるが、同地区はフランスにおけるアジア系社会イメージの典型を形成しつつも、このような物理的環境から一般的に想起される「チャイナタウン」とは景観上様相を異にしていることも大きな特徴のひとつである。

ところで、奇しくも昨年10月から今年7月まではフランスにおける「中国文化年」に相当し、多数の中国関連行事が行われ、パリにおいても「中国熱」は沸騰している。今年1月のアジア系最大の年中行事である旧正月の際もシャンゼリゼ大通りを舞台に一大パレードが行われ、さらにエッフェル塔は5日間紅くライトアップされた(そしてその最中に胡=シラク首脳会談が行われた)。例年は13区で催される旧正月のパレードも今年はシャンゼリゼ大通りでのイベントに多くの団体が動員されたため行われず、例年13区の地域イベントには参加し

ながら、「中国文化年」の一環としてのシャンゼリゼ・パレードが中仏国交樹立40周年を記念する政治イベントであるがゆえ参加しなかった団体もあった。他方、パリで発行されている大陸系有力華字紙のシャンゼリゼ・パレード翌日の一面トップ記事はなぜか「ユーロ・ディズニー」の春節イベントであった。

このような国際政治、グローバル文化産業といったマクロな政治経済的文脈との錯綜を視野に含めつつ、いかにローカル・レベルでのアジア系民族社会の複合的かつ動的な文化構成に迫ることができるか。この課題への挑戦こそ、空間表象レベルでわれわれが一般的に想起する「チャイナタウン」とは全く異なる超高層集合住宅群に展開する13区の「チャイナタウン」において最も「チャイナタウンらしい」建築意匠を採っているのが実は「マクドナルド」であるという逆説を説明することにもなるだろう。

清水宏と植民地のロードムービー

日本帝国主義と映画

シャロン・ハヤシ氏(映画史学者)

2003年2月5日

立教大学池袋キャンパス 8101 教室

小津、溝口、黒澤に匹敵する巨匠でありながら、今なお不当に閑却されている映画監督、清水宏(1903-1966)の十五年戦争期における作品をめぐって、映画史研究家のシャロン・ハヤシ氏によるきわめて刺激的な講演会が開催された。入試直前のあわただしい時期だったにもかかわらず、客席には学外から参加された映画研究者の姿も散見され、聴衆の高い関心がうかがわれた。

昨年、小津安二郎とともに生誕 100 年を迎えた清水宏は、大まかにいって戦前戦中を松竹の契約監督として、戦後をフリーの独立系監督として過ごし、生涯に遺した作品は 163 本に上る。代表作はひとつおりビデオ化されているというのに、彼の名前がいまだに一部の映画ファンのあいだでしか知られていないのは実に不可



日本映画にロケ撮影を取り入れたの清水宏だった

解である。とはいえ、昨年開催された第 4 回東京フィルメックスでの回顧上映を期に、今年に入ってベルリン国際映画祭や香港国際映画祭で特集が組まれるなど、清水宏再評価の機運は世界中で高まりつつあり、その意味でもハヤシ氏の講演は時宜を得たものであった。

だがハヤシ氏の講演が、偉大な映画作家の列に清水宏を新たに付け加えようとするものではなかったことに注意しなければならない。ハヤシ氏は、撮影所の一契約監督にすぎなかった清水宏が商業的な要請、ましてや国策に正面から逆らえるような立場にはなかったことを十分に了解している。しかし、それだからこそ、十五年戦争期の日本の映画産業を跡づけるうえでの清水宏の重要性が浮上することになるのである。

ハヤシ氏は、清水宏の作品を「旅行映画」として捉えることを提案する。実際、清水宏の作品は通常の意味での物語性が希薄であり、登場人物の多くは映画のなかで「旅」をする。その切れ目のない「旅」の過程に息の長い移動撮影で寄り添うことは、清水宏が映画テキスト内に記入した作家としての署名でもあるのだが、ハヤシ氏はそれをむしろ植民地における旅行や交通との関係において理解しようとする。むしろ、その際のハヤシ氏の手つきは、テキストを制作当時の時代状況に還元して事足りりとする素朴な現実反映論とは無縁のものだ。そうではなく、十五年戦争期の清水宏の作品が、移民労働者や被支配民族といったマイノリティの表象をテキスト内に導入することで、植民地の現実を批判的に変容させている点に注目するのである。



上映された『有りがたうさん』から、バスの運転手と朝鮮人女性の別れのシーン



シャロン・ハヤシ 氏

代表作のひとつ『有りがたうさん』(1936)に注目すべき朝鮮人の表象が含まれていることは以前から指摘されてきた。道を空けてくれる通行人にいちいち礼をいう善良な乗合バスの運転手を取りあえずの主人公に、乗客たちのさまざまな人間模様を点描するこの作品には、道路工夫として働く朝鮮人労働者の一団が登場しており、そのなかのひとりの女性と主人公が対話する情感あふれるシーンまで存在する。このことの政治的意義自体はすでに周知のものなのだが、ハヤシ氏の独創性は、この朝鮮人の表象を映画に固有の視覚的快楽の問題として考察した点にある。すなわち、曲がりくねった狭い山道をゆくバスの移動と一体化してしまったようなカメラの移動がひたすら心地よいこの映画において、唯一その視覚的快楽から疎外されているのは、決してこのバスの乗客たりえない朝鮮人

労働者たちであり、しかも日本人に視覚的快楽の独占を許すこの山道をつくりあげたのは、ほかならぬ彼ら朝鮮人なのだ。ここにおいて、主人公と対話する朝鮮人女性(もちろん、停まったバスの外である)が身にまとうチョゴリは、単なる衣裳を超えた少数者の視覚的指標として、国民国家の均質性に疑問を投げかけることになるだろう。同じように、台湾の少数民族である高砂族の少女を主人公に大東亜共栄圏の国民化を謳った『サヨンの鐘』(1943)も、あざやかな民族衣裳を着た子どもたちが家畜といっしょになってくりひろげる猥雑な祝祭として捉えなおされることになる。

多岐にわたったハヤシ氏の議論をすべて要約することは不可能だが、ここに開かれたものとは、従来「女子ども」の映画として軽んじられてきた清水宏の作品群を、戦後日本映画

の政治学においては欠落してしまったルンペン・プロレタリアートの問題軸において再考する可能性である。当日ディスカッサントをつとめた藤井仁子はこのきわめて重要な論点を引き継ぎ、それをさらに清水宏の非＝メロドラマ性として展開した。いわゆる傾向映画(映画におけるプロレタリア文学の相同物)でさえ、その大半は富める者と貧しき者の階級的対立を情動へと翻訳して描くにとどまり、ブルジョア的価値観に由来する西洋的なメロドラマの図式を一步も出なかった。これに対して清水宏の映画はいつしかその 中間 へと拡がり出し、メロドラマ的な図式からはこぼれてしまう真の少数者の存在をあきらかにする。スタートでもゴールでもないそうした 中間こそが清水宏にとっての終わりなき「旅」の舞台ではなかった。

ハヤシ氏が提起した問題は、映画研究のみならず、他の隣接諸領域にも学際的なインパクトをおよぼす可能性に満ちている。ハヤシ氏の研究のさらなる進展が待たれるとともに、私たちひとりひとりがそこから受け取ったものを各自の領域において敷衍していかなければなるまい。

最後に、清水宏に関する唯一のまとまった刊行物として『映画読本 清水宏』(フィルムアート社)があり、彼の「旅」に同道するためのガイドブックとして有用であることを付け加えておく。

付記

シャロン・ハヤシ氏は、2004年度に本学で、日本映画の言語と同一性の問題、歴史的・政治的背景等について取り上げる、全学共通カリキュラム総合A群 歴史・社会「Japan in Asia 1 - Koreans in the Japanese Cinema」において教鞭をとっている。

報告

02 公開公演・講演会

北インドの舞踊「カタック」の伝統 パキスタンの舞踊家による レクチャー・デモンストレーション

ファシーウル・ラフマーン氏(カタック舞踊家)

2004年4月10日

立教大学池袋キャンパス7101教室

本研究所はこれまでもインド・韓国・インドネシア・中国等のアジア伝統芸能をめぐる公開公演・講演会を開催し、そのつど、多くの参加者から高い評価を得てきた。そしてこのたび、インド亜大陸の北部一帯に伝わる古典舞踊の「カタック」の名手がパキスタンから来日することになり、立教大学でも公開公演・講演の場を設けることとなった。

インド舞踊といえば、以前にやはり本研究所の公開公演・講演会で演じていただいた南インドの「バラタナーティヤム」がよく知られているが、「カタック」はそれと並んで、インド世界の北部一帯に伝わる舞踊伝統を代表するものである。しかしカタックは、これまで日本では見る機会がかなり限られていた。しかも今回のように、パキスタンからのカタック演者をお迎えするのは、日本で初めてのことでないかと思われる。



ファシーウル・ラフマーン氏



ファシーウル・ラフマーン氏による舞踊の実演

古典舞踊の起源を語ることは常に難しく、「カタク」の起源も不詳である。その語からすると、「カターカル」すなわち語り部と関係があるようであり、かつては「カター」すなわち地域に伝わる神話伝承の類を舞踊で表現したものであったと考えられている。

しかし北インド一帯が 13 世紀以来イスラーム王権のもとに入ると、ことに強大な勢力を誇ったムガル王朝(1526-1858)の庇護のもとにあつてこの舞踊形式はヒンドゥー色を払拭し、複雑なリズムと絡みあうステップ、そして跳躍・回転などによる身体表現を中心とした純粹舞踊としての発達をとげた。ことに 18 - 19 世紀になるとカタク



縄につけた 200 以上の鈴。足首に巻きつけ、ステップを踏みながら良く通る音を響かせる

は、北部一帯の藩王や首長たちの宮廷でさらに磨き抜かれ、洗練されたものとなっていった。

その点カタクは、多くの場合ヒンドゥー儀礼とかかわりをもつ他の「インド舞踊」とは異なるが、1947 年のインド = パキスタンの分離独立後は、インド側では再びそこにヒンドゥー要素を撮り入れた舞踊の再編が行われた一方、パキスタン側では、かえってこの数百年來の、純粹舞踊としてのカタク伝統を守ってきているといえる。

ただし、インドのようにパトロンの庇護を受けることも少なく、経済的にも厳しいうえ、歌舞音楽に概して冷淡なパキスタンのイスラーム社会にあつては、イスラーム神秘主義歌謡の「カワリー」ならばともかく、主として視覚に訴える舞踊をとりまく環境は厳しかった。そのなかで、かつてのアワド侯国・ラクナウ派のカタク伝統をパキスタンに伝えたのが「伝説的」舞踊家のカタクマハラジ・グラーム・フセインであり、今回来日したファシーウル・ラフマーン(1969 年生まれ)は、その数少ない若手の継承者なのである。

(小西正捷 / アジア地域研究所研究員)

研究所日誌 2003 年度後期

- 09・27 公開講演会「黄土の民はいま」: 池谷薫 (映画監督)
- 10・01 第3回所員会議
- 10・04 第65回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「地域への分権と文化・言語 ヨーロッパと日本 Culture and Language in Changing Regions Experiences in Europe and Japan」: Colin H. Williams (ウェールズ・カーディフ大) + Ernest Querol Puig (カタルーニャ州政府カタルーニャ語社会言語学研究所所長) + 石原昌英 (琉球大学) + 原聖 (女子美術大) + 宮島喬 (立教大)
- 10・23 第3回総合研究センター委員会
- 11・19 第66回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「在日フィリピン人女性と日本社会 - カパティランでの活動から」: 長谷川祥子氏 (「カパティラン」相談スタッフ) + 宮島喬 (立教大)
- 11・22 日本イスラム協会公開講演会・シンポジウム「南アジアの基層文化とイスラーム」 / 「製紙技術の伝播とイスラーム」: 小西 正捷 (立教大) + 「音楽に見る文化融合」: 村山 和之 (和光大) [アジア地域研究所共催]
- 11・27 第3回アジア研究・学術フロンティア運営委員会
- 12・11 第4回総合研究センター委員会
- 12・12 第4回アジア研究・学術フロンティア運営委員会
- 12・12 第4回所員会議
- 12・17 第67回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「現代アメリカとアジア系アメリカ人『人種』の概念と関わらせて」: 竹沢泰子 (京都大人文学研究所) + 水上徹男氏 (立教大)
- 02・05 公開講演会「清水宏と植民地のロードムービー - 日本帝国主義と映画」: 講師: シャロン ハヤシ (映画史学者) + 藤井仁子 (立教大)
- 02・06 第5回総合研究センター委員会
- 02・25 第68回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「日本の帰化制度と外国人」: 熊谷史 (立教大大学院) + 「ロシア人船員上陸に伴う地域社会への影響 - 日本社会における対外国人意識の表象として」: 小林真生 (早稲田大大学院)
- 03・13-14 アジア研究・学術フロンティア第1回「安全保障」シンポジウム “EXPANDING THE HISTORY OF GLOBALIZATION”: 五十嵐暁郎 + 山室信一 + 松本三之介 + 小西正捷 + 豊田由貴夫 + 副島博彦 + Prasenjit Duara + Ann Heylen + 弘末雅士 + Mark E. Caprio + Alexis Dudden + 疋田康行 + 須永徳武 + Daqing Yang + 鈴木邦夫 + 小林英夫 + 山脇千賀子 + 田房由起子 + 市川哲

RUCAAS News letter

立教大学アジア地域研究所ニューズレター No.12

発行日 : 2004年6月30日

発行所 : 立教大学アジア地域研究所

Rikkyo University Centre for Asian Area Studies

〒171 - 8501 東京都豊島区西池袋3 - 34 - 1 立教大学ミッチェル館

Tel : 03 - 3985 - 2581 Fax : 03 - 3985 - 0279

e-mail : ajiken@rikkyo.ac.jp

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/ajiken/>